

立命館

総合情報センターだより100号記念特集号

<p>表紙 2~7 8~13 14 15~19</p>	<p>巻頭言 センターだより100号の歴史を振り返る 図書館100年のあゆみ 歴代館長 寄稿 「図書館100周年に寄せて」 立命館大学図書館長 水口憲人氏 「立命館大学図書館の思い出」 立命館大学名誉教授 中井美雄氏 「立命館大学図書館開設100周年」 立命館大学文学部教授 大戸千之氏 「末川博先生の蔵書受入と立命館出版部のことなど」 西岡成幸氏 「ITとの格闘」 BKC研究部門次長 郷端清人氏</p>	<p>20~21 22 23</p> <p>統計で見る図書館100年 学生スタッフ活躍中! ・RAINBOW STAFF ・LIBRARY STAFF 問い合わせ先</p>
--	---	--

図書館開設100周年を記念して

本学図書館は、1900(明治33)年に立命館大学の前身となる京都法政学校が創立された5年後に、当時の広小路校舎に図書室を附設し図書資料を保存、提供する図書館として業務を開始し、今年、開設100周年を迎えました。

100年の歴史のなかで、本学図書館の蔵書冊数は全学で240万冊を超えており、近年は年間200万人を超す入館者が利用しています。また「白楊荘文庫」「西園寺文庫」「末川文庫」「パリ講和会議資料コレクション」「GHQ/SCAPマイクロ資料」「加古文庫」といったコレクションには、学外からも多くの利用があります。

本学図書館は、全国の大学に先駆けて、開館時間の拡大、データベースの拡充、資料整理期間の短縮などを行ってきました。図書館の年間開館日数は330日(2004年度)など、全国でもトップクラスの利用環境を整えるまでに成長しました。大学における学術資料の一拠点として、学生や教員の学習・教育・研究活動のために図書館はなくてはならない存在です。

一方で、IT化が世界的規模で進行する中で、大学図書館はこれまで経験したことがない変革の時代に突入しています。学術情報は、電子ジャーナルの進展に見られるように、従来の紙媒体を中心にした図書資料からインターネットを活用したデジタル資料へ急速に変化しています。

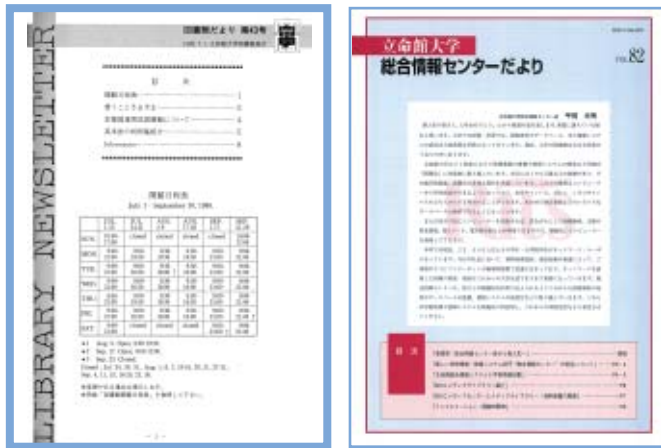
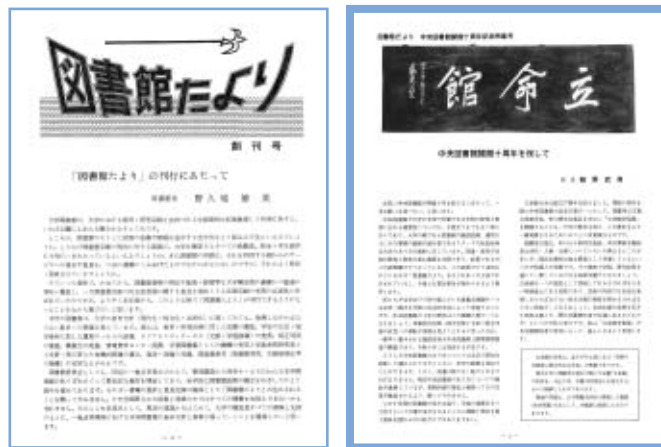
これからの大学図書館は、教育・研究に対して学術情報サービスのさらなる高度化を図り、グローバルなレベルでの利用者のニーズに積極的に応えていくことが求められます。新しいメディアを活用したハイブリッド型ライブラリーを構築し、情報化社会に対応した学術情報サービスを展開していくことが必要です。

図書館が「学習と研究の場」としての役割を引き続き果たすとともに、「知的興奮が渦巻く大学」の中核としての機能の一つとなるよう期待します。



図書館だよりは、1961年（昭和36年11月）に読書週間特集号として初めて生まれ、さらに翌年の1962年（昭和37年12月）にも再び1号として「としょかんたより」「読書調査特集」が発行され、その後12年の中断後1974年に「再び」創刊されました。ここでは、その図書館だより100号の歴史の中から30年の軌跡を浮き彫りにしてみたいと思います。以下にいくつか選んで掲載しました。

- 創刊第1号 1974年 6月 「図書館だより」（但し、これだけは「図書館たより」）
- 第5号 1975年 9月 加古文庫に憶う
- 特集号 1977年10月 中央図書館開館十周年記念特集号
- 第14号 1978年 6月 日曜開館を実施して
- 特集号 1981年 2月 広小路分館閉館記念特集号
- 第42号 1988年 3月 ゼミ訪問記（継続シリーズから）
- 第52号 1990年11月 東京にて西園寺展開催—大きく成功
- 第58号 1992年 4月 文書情報整理元年
- 第74号 1996年 4月 開館時間・開館日数を大幅に拡大！
- 第82号 1998年 4月 より、現在の「立命館大学総合情報センターだより」



「図書館たより」の刊行にあたって

図書館長 野久尾 徳美

大学図書館は、大学における教育・研究活動を血肉づける文献資料を収集整理して利用に供する、いわば心臓にもあたる働きをなすところです。

ところが、図書館のそうした役割の意義や課題を追求する全学的なとり組みは万全といえるでしょうか。とりわけ図書館活動の現状に対する認識が、大学を構成するすべての教職員、院生・学生諸君に十分にいきわたっているといえるでしょうか。また図書館の活動は、それを利用する側からのサービスへの要求や意見を、つねに適確にききあげたものでなければならないのですが、それがよく吸収・反映されているのでしょうか。

そういった意味で、かねてから、図書館業務の現状や施策・課題等を大学構成員に適確かつ敏速に周知・徹底し、一方図書館活動の民主的発展に関する意見を集約しうる広報活動の充実の必要性が叫ばれていたのですが、ようやく本年度から、このような形で「図書館たより」が刊行できるようになったことを心から喜びたいと思います。

1974年6月 創刊号

野久尾 徳美 ▶
1965年4月～1979年3月在職
元立命館大学産業社会学部教授
（専門分野：生活福祉論）
1966年4月～1967年3月
産業社会学部長
1974年4月～1975年9月
図書館長



加古文庫に憶う

法学部教授 天野 和夫

故加古祐二郎教授の学問や立命館大学に寄贈された蔵書、すなわち加古文庫のことについては、すでに同教授を良く知る何人かの方々によるモノグラフがある。私は、立命館で法哲学の講義を担当していること、また故巨藤恭博士の指導を受けたことでは、同教授と共通するところがあるけれども、1937年におよそ33歳の若さで永眠した同教授とは当然のことながら全く面識がない。巨藤博士は同教授の死を学界のためにたいへん惜しんでおられ、その気持ちを私にも洩らされたことがあった。

私が立命館に赴任したとき、まず訪れたのは図書館の一角にまとめられた加古文庫である。この文庫のことを加古教授の研究論文集『理論法学の諸問題』（日本科学社刊）の編者序で、あらかじめ知っていたからである。書架には、専門である哲学・法哲学関係の文献はいりまでもなく、国家論、政治学、社会学にわたって、多くの内外の図書が配列されていた。駆けだしの研究者にとっては、その精選された蔵書に圧倒される思いがした。

加古教授の法哲学、特にその学問的立場については、今日でも、多少ニュアンスの異なった評価がある。加古文庫の内容からもうかがえるように、同教授の学問形成には、日本の西田哲学、田辺哲学、またドイツの古典哲学、20世紀初頭の新カント派、現象学、存在論、知識社会学等の諸系譜が、少なからぬ影響を与えたと思われる。それが、同教授の論理の運びや叙述の進め方を、大方の



加古祐二郎教授

読者に理解と感じさせる一半の原因をなしたであろう。しかし、前記『理論法学の諸問題』の増補版である『近代法の基礎構造』（日本評論社刊）の巻末で、巨藤博士が遺囑しておられるように、同教授の立場は、明らかに「マルクス・レーニン主義、言いかえると唯物弁証法の世界観・社会観を根柢とする」ものであった。

加古教授の法学をマルキシズム法学として見ると、その主要な視点は、法形態論からの法の歴史的存在性格の解明に向けられたということができる。マルクスの『資本論』の理解から出発して、バジューカーニスの『法の一般理論とマルキシズム』の批判的摂取が、加古法哲学の核心を形作ったと考えられる。戦後の今日、そこに法本質論の欠落を指摘し、あるいはマルキシズムの常識論とあげつらうことは、きわめてやさしいであろう。しかし、戦前ファシズムの嵐が吹きすさび、しかも当時の法哲学界における一般的風潮のなかで、実質5年間の短い研究生活の間に、このように強靱な思索の跡が展開されたということは、まことに驚異に値する。

加古教授の学問は、われわれに、あくなき真理探求への熱情、学問に対する誠実さ、そして過去の学問的遺産を自己の頭脳で考え抜くという現代人の忘れかけた貴重な態度を教えている。時代の制約は、加古教授を書斎の人にしたけれども、今日は、同教授がもどかしく理想した理論と実践との結合が、現実の課題になっている。



加古文庫のブックシール

▲ 天野 和夫
1951年4月～1989年3月在職
元立命館大学法学部教授（専門分野：法哲学）
1966年4月～1968年3月 法学部長
1978年7月～1984年12月 立命館総長

竹田 直平 ▶
1933年4月～1947年6月在職
元立命館大学法経学部教授
（専門分野：刑事法）
1938年10月～1940年4月 法律学科部長
1945年1月～1946年6月 図書館長

歴史と回想

終戦前後における 図書蒐集事情

竹田 直平

本学の中央図書館が新設開館されて満十周年になるのを記念して「図書館だより」の記念特集号を発刊する計画を立てたので、在任中国書館の仕事に関係していたことがあるというので、何か当時の思い出でも書いてほしいというご依頼を受けました。それで、記録を一寸調べましたところ、昭和9年頃に「立命館大学文庫委員」なるものを仰せつかったり、また昭和20年1月には「図書館長を命ずる」という詔令を買ったりしていることがわかりました。文庫委員としては、専門関係（法学、特に刑事法関係）の外国書の新刊図書雑誌の選定等に関与していたように思いますが、具体的なことについての記憶はあまり残っていません。戦争末期、特に戦後の図書購入については若干印象していることがありますので、

◁ 1975年9月 第5号
▽ 1977年10月 中央図書館開館
十周年記念特集号

それについて少し書いてみようかと思えます。今の若い人達に興味のあることでもなさそうですが、こんな時代もあったのかということを知ってもらえば幸いです。終戦末期になると新刊書というものは一般書・専門書を問わず殆んど出なくなっていました。たまたまザラ紙の小型の本が出ては時局ものばかり、どれもこれも固粋主義一色ですすから食指の動くものはありません。市内の古書店には若干珍しい本を書棚に並べている店もありましたが、激しいインフレで物価が毎日のように上昇するので「お金では売れません、これに代わるような書物を持ってきて下されば交換いたします」というので買うことはできません。終戦後暫くして、岩波その他から哲学書、学術書等が出るようになりましたが（その発売日の前日から学生達の長い行列ができたということは今でも語り草になっていますが）、少数の書物が京都へも運んで来るようになりました。その頃図書館専事に伊集院という中年のベテラン司書がおられましたので、その方と一緒に図書館配所とされていた三條朝日会館の二階に行きました。大勢の買手にもまれて大きなボール箱から新刊書が一冊二冊と取り出されるのですが、伊集院さんの手の早いこと、百人一首のカルタをとるような調子で電光石火の中にとり込まれる早業に驚きました。今でも覚えていますが、その中に辻善之助著「日本仏教史上巻」、藤島哀治郎著、大坂の「桂離宮」等の名著が含まれていました。私のように視力が弱く、おまけに運動神経の鈍い者は、一冊も手にとらない中に、他の大勢の買手にとられてしまうのです。伊集院さんのおかげで当時の図書館が大分得をしたような気持ちになって帰ったことを覚えています。それでも戦後暫く経つと、専門外国書等については、それまで見られなかった新しい様相が現れました。当時学者先生方は、食物その他生活費の暴騰と預貯金封鎖とのさきみ打ちで、みな窮生活をしていました（身の皮を一枚宛刺いで古着屋へ売るとか、売手の百姓達に渡すとか）が、それも限度があるので、大切にしていた専門関係の蔵書まで売り出したから。それで古書店に行くと、思わぬ大冊の専門原書や西洋著名学者の全集等に会うことが多くなったのです。それで私も図書館のために、オープンハイマーの社会学大系大冊五巻を買ったことを覚えていました。本書の第一巻はご承知のように一般社会学上下二冊、第二巻は有名な国家論、第三巻は純粋経済学上下の五巻からなっています。関心のある方は書庫を見て下さい、必ずあるはず。このほかカール・ポピンズの『規範論（ノルメン）』五冊も見つけましたが、これは私の専門に関するもので無理をしながら私所有として購入しました。後にこの本等を基礎資料として学位論文を仕上げることができました。そのほか、ワイルヘルム・ヴントの名著、大冊三冊からなる論理学や、キディングス、ウォード、グンプロヴィツ、マクキューパー等の社会学書やフランツ・フォン・リストの、それまで手に入らなかった『論文集』やその他の専門書もその頃購入することができましたのはある種の幸運でした。けれどもその頃ある古書店でハーバート・スペンサーの全集26冊本が出ているのを見つけましたが、図書館の予算も底をつき、私の資力も無かったので残念ながら見送りました。これは今でも思い出して惜しいことをしたなと無念です。

しばらくして私はG項談当者として教職退職の身分となりました。激しいインフレの続く中で翌月から一銭の収入もなくなったのです。わずかの預金を引出したり、その頃景気の良かった朝鮮青年の私設の学校のようなところに講師に頼まれて行ったりして、わずかに露命をつないでいたのですが、それでも私の古書漁りの習慣は止みませんでした。僅かに金10円を投じて稀覯書渡辺華山の「掃部卿」（名古屋全堂堂蔵版）を手に入れて小踊りして帰宅したことを記憶しています。この本は夏目漱石の蔵書目録の中にも挙げられている程木版彩色のきれいな函装で、その後出版された華山関係の書物には、必ずといってよい程写真版として引用されておりますので、今も時々出して見て悦に入っています。

こんな話を書けばきりがありませんが、戦後の暫くの間は、外国書、稀覯書等を購入するのに、絶好のチャンスを与えてくれたように思います。

日曜開館を実施して

運営課長 長屋善晶

〈実施までの経過〉

日曜開館実施が具体的な課題となったのは、1972年7月2部学生からの要求があったからである。当時、大学、図書館職場としてはこの要求について事務体制上の不備があるため実施については将来的検討課題とした旨の回答をした。ところが学生側としては、近い将来かならず実施する方向で検討すべきであるとし、当面、日曜開館実施までの暫定時においては、開館時間を延長（PM.9:00→PM.9:40）し、試験期の日曜開館を実施してほしいという要求が強かった。

大学、図書館職場の受け止め方は、2部学生の学習条件の保障という基本的立場については、正しい要求として受け止めることができるが、問題はこれを実施する場合の事務体制上の条件整備が大きな問題として残されていた。就中、職員の労働条件の厳しきは極めて大きな問題であり、問題解決について大学と図書館職場との再三にわたる交渉の結果、ようやく定員増が認められ、実施に至ったのは1972年9月のことである。

1975年になり、2部学生側から検討課題となっている日曜開館実施の早期実現について強い要求が出された。図書館職場としては、2部学生との懇談会を開き、1972年以來実施してきた時間延長実施後の総括をおこない、(1)開館時間の延長を実施したが、利用者が少ない。(2)これに反して事務体制上に多くの欠陥が生じてきた等の実態報告をおこない、図書館、学生側相互に検討をおこなったところ、時間延長実施上のメリットが少ないことを学生側も認め、すなわち日曜開館を実施することが望ましいという結論に達した。

1976年においては、前年度の確認の方向にそって学生側から即時実施という形で要求実現について強く迫られたが、大学、図書館職場としては、依然として続行される二拠点という救いがたい状況の中では、完全実施に踏み切るためには事務体制上の再整備が必要であった。そこで衣笠一拠点実現にともなう文学部、2部移転時に実施するという展望を明らかにし、学生側に提示したところおおむね了解点に達した。

1977年となり、2部学生会と2部移転に関する諸問題

の中で特に重点課題としての日曜開館の具体的実施内容につき懇談し、2部移転時を契機として2部二講制実施の具体的事例と結合させた図書館サービスを実施するというで合意に達し、現在に至ったのである。

〈図書館職員の立場〉

日曜開館を実施して1ヶ月半を経過したが、経過のところで述べたとおり、これが実施に至るまでには長年月にわたり多くの論議があり、問題がなかったわけではない。しかし、いまここで日曜開館是非論を云々する考えは毛頭ないが、日曜開館実施が今後果して学生のものになりうるか、それを受け止める図書館職員の労働の内実化となりうるためにはどのようにすべきかということを実際に考えさせられる昨今である。

図書館職員の立場からすれば、先づ学生諸君に望むことは大いに図書館を利用してもらうことが先決である。しかし、漠然と利用が増えるということは期待していない。真に図書館の中味を利用する学生が増えることを大いに期待したい。学生諸君の中には毎日曜日を図書館での学習に費すことは結構なことだが、学生生活という当然なことに、ある日曜日はのんびり野外や史跡を散策することも結構だし、あるときは身のまわりを整理することに費すことも極めて当然なことであるといえる。しかし、日曜日は図書館が開館しているということをおぼえてもらいたくないというのが偽らざる気持である。折角、学習の場が保障されているのに、全く利用しないということはみづからの要求に反するし、図書館職員の労働意欲を減退させることにもなりかねない。

それにつけても、今日の社会情勢は、週休2日制の方向にあり、労働者側の生活保障が進んでいる中で、図書館職員は真方さんとして、振替休日の実施、女子労働、定員不足にあえぎながら、学生諸君の学習権を保障しうる図書資料とスペースを確保し、学習、研究サービス要求にこたえ、図書資料、図書館利用に対する学生の反応を把握し、学習・研究の創造の一翼をになうとともに、利用者のふれあいから、意見、読書相談等を高めるために努力を傾注していかなければならないと考えている。

学園紛争の前後

建林正喜

十年ひと昔という。いまは昔、43年春のことであった。末川総長から館長任命の内示があった。その年の春までわたしは経済学部長を要退正直に2年間めあげた。ほんとにしんどい2年間であった。当時、経済学部の自治会には、教師を権力と規定し、学生大会も開かぬ一握りの暴力学生が居座っていて、これを民主化しようとする良心的な学生大衆との対立が頂点に達していた。42年の手帳をみると、この年徹夜十数回、連続徹夜2回に及んだ。学部主事戸木田教授や補導主事浜崎教授の粉骨砕身の努力もさることながら、42年秋命運を決する「学生集会」の行方如何と、末川総長をはじめ全学部長が深夜まで衣笠の事務室に参集された熱意は、わたしには忘れ難い思い出である。自治会の民主化はやっと結についたけれども、わたしは極限に近い疲労感と、講義も崩壊しそうな危機感に苦しんでいた。それがやっとなら解消されると思

建林 正喜 ▶

1964年4月～1974年3月在職

元立命館大学経済学部教授

(専門分野：経済原論)

1966年4月～1968年3月 経済学部長

1968年4月～1970年3月 図書館長

◀ 1978年6月 第14号

▽ 1977年10月 中央図書館開館十周年記念特集号

きや、新図書館長就任の話である。わたしはさっそく前任の国崎館長に相談した。「何もせんでもよいですよ、何もしない方がよいですよ」おおよそそういう内容が国崎さんの話であったように思う。あるいはこれは分館長の、いまは亡き大西教授の話だったかも知れぬ。とにかくわたしはほっとして総長の内示をお受けする気になった。そしてやがてお受けしてよかったと思ひ、天野教授の推薦もあったと聞いて友情に感謝した。

図書館の職員はみんな誠実で勤勉で仕事に精通したベテランであった。なるほどこれなら何もせんでもよい訳だ。毎月何回かの図書選択委員会を楽しみに出席した。そこにはありとあらゆる分野の古典や新刊書があった。M・アーノルドの読書論に、本を読もうと思うならば、何はさてbookish atmosphereをつくれとある。さてこれがその「本くさい雰囲気」かと感得した。図書館長たるものは数か国語をあやつり、古今東西の事情に精通しているものでなければならぬというのが、前任の広島大学の基準だった。なるほどそれはこのことかと選書の機会毎に反省もした。

もちろん楽しいことばかりだったと云えば嘘になる。43年暮れの新聞社事件をきっかけに44年は学園紛争に明け暮れた。何しろ「わだつみ像」をもひきずり固す輩である。この真新しい図書館にいつ侵入するかも知れない。それを防いだのは大学のシムボル新図書館の偉容もさることながら、図書館を守ろうとする教職員や学生の一致した結束にあった。この図書館があるかぎり立命館は亡びないことを痛感した。学園紛争が全国にひろがっていたその夏、私大図書館協会第30回大会を成功裡に当番校として主催したとき、参加校120校、226名のひとたちが驚嘆したのはこの大学の力量であった。省みればわたしは何という幸せな館長であったらう。感謝の辞があるだけである。

八十年のあゆみ

—新たな発展を目指して—

草創時代から

立命館文庫時代 (1900～1945)

1900(明治33)年5月、鴨川畔は東三本木町の科学清輝楼を仮校舎として立命館学園の前身、京都法政学校が開校された。東京帝国大学のアカデミズムに対して、自由清新な京都帝国大学の諸教授を講師として、もっぱら政治経済が講じられる夜学校であった。もとより開校の仮住まいであれば、図書室に類するものはなかったであろう。

翌年12月には払下げを受けた旧京都府立中学校々舎の一部、1棟3教室の移築をみた現在の地広小路に移転しやや学校らしい体裁をととのえている。

1903(明治36)年、この年制定された専門学校令に準拠して、京都法政専門学校となり、さらに翌年7月には京都法政大学に改組された。「明治38年度法政大学事業表」によれば、学校の附属施設として木造の図書室と書庫が建設されたことが記されている。

現存する当時の図書原簿をひもとくと、1905(明治38)年7月の日付で図書受入れ業務を開始、登録図書第1号として、「相統法論 奥田義人(著)一(撰)民法(部)」と記録している。

当時の蔵書印は「京都法政大学図書」の小判印、ラベルは種数、冊、番号、部、門の5項目を記載し、表紙上



第1回卒業証書

部の左端に貼付されている。

分類は、哲学、文学、歴史、地理、憲法、国法学、刑法、行政法、政治学、民法、商法、国際法、法規、法律論、経済、経済論、財政、統計、雑書の19部門に区分されており、当時の蔵書冊数は2,234冊(和書1,179部、洋書237部)となっている。

1908(明治41)年12月、夜半講堂から出火し校舎の大半を焼失したが、図書室は辛くも類焼を免れた。

1913(大正2)年12月、財団法人設立とともに立命館大学と改称、つづいて1918年12月に公布された新大学令の公布により官立と同格の私立大学の設置が可能となり1922(大正11)年6月、いわゆる旧制大

当時の大学の機構は、ならなり、教学の充実を期し、校舎の拡充、図書の整備充実

大正の後半期は教学の充実と歩調を合わせて図書が大蔵に購入され、また漸増が相次いだことにより文庫の蔵書は、質量ともに飛躍的な増加を示した。これにともな

1924(大正13)年12月、工費3万円を費して2階建ての図書室を建設した。これにより文庫の蔵書は、質量ともに飛躍的な増加を示した。これにともな

1926(大正15)年末、図書室が完成し、専任教員とともに学園の総合文庫としてかくして立命館文庫は大正期の

1931(昭和6)年11月、夜間開館実施と記録されているが、詳細は明らかではない。昭和10年代には特殊文庫による「西園寺文庫」小泉三三氏の旧蔵書である歌書、雑誌の「白楊荘文庫」(後年に命名)、漢字三輪氏蔵書の旧蔵書で、漢籍927

1931(昭和6)年11月、夜間開館実施と記録されているが、詳細は明らかではない。昭和10年代には特殊文庫による「西園寺文庫」小泉三三氏の旧蔵書である歌書、雑誌の「白楊荘文庫」(後年に命名)、漢字三輪氏蔵書の旧蔵書で、漢籍927

1931(昭和6)年11月、夜間開館実施と記録されているが、詳細は明らかではない。昭和10年代には特殊文庫による「西園寺文庫」小泉三三氏の旧蔵書である歌書、雑誌の「白楊荘文庫」(後年に命名)、漢字三輪氏蔵書の旧蔵書で、漢籍927

1931(昭和6)年11月、夜間開館実施と記録されているが、詳細は明らかではない。昭和10年代には特殊文庫による「西園寺文庫」小泉三三氏の旧蔵書である歌書、雑誌の「白楊荘文庫」(後年に命名)、漢字三輪氏蔵書の旧蔵書で、漢籍927

1931(昭和6)年11月、夜間開館実施と記録されているが、詳細は明らかではない。昭和10年代には特殊文庫による「西園寺文庫」小泉三三氏の旧蔵書である歌書、雑誌の「白楊荘文庫」(後年に命名)、漢字三輪氏蔵書の旧蔵書で、漢籍927

1931(昭和6)年11月、夜間開館実施と記録されているが、詳細は明らかではない。昭和10年代には特殊文庫による「西園寺文庫」小泉三三氏の旧蔵書である歌書、雑誌の「白楊荘文庫」(後年に命名)、漢字三輪氏蔵書の旧蔵書で、漢籍927



蔵書印

◀ 1981年2月 広小路分館閉館記念特集号



興学館と存心館 (1925年開)

部、4,286冊からなる「教育文庫」、加古祐二郎氏旧蔵の法哲学、社会学および経済学の図書からなる「加古文庫」などである。

1935(昭和10)年には創立35周年を迎え、記念事業の一つとして中川会館が翌年1月に完成をみた。1階は出版部、職員室、学生研究室、2階は学長室、法学部研究室、文学部研究室、予科研究室、高等商業科研究室、3階は総長公室、校友集會室、特別講義室、応接室に当てられた。教員の各研究室には研究用図書が設置されて本学

また、記念出版活動が活発に行われている。近衛家に伝わる「御堂問白記」14巻の複製刊行をはじめ、言文一傳する「美妙選集」上・下巻、「立命館三十五周年記念論文集」(文学部、法経部)などが刊行された。これら

草稿は現在館内に保存されている。太平洋戦争下、空襲による被害を恐れ重要図書の一部を待機倉庫に移し1945(昭和20)年8月の終戦をむか

こうして「立命館文庫」は、開学以来の図書を連続と引継ぎ、1922～1945(大正11～昭和20)年まで23年にわたるその役割を果たしたのである。

こうして「立命館文庫」は、開学以来の図書を連続と引継ぎ、1922～1945(大正11～昭和20)年まで23年にわたるその役割を果たしたのである。

回想の図書館

広小路図書館の思い出

岸本友一

いろいろな思い出をのこして広小路学会はあつたはずか
でその歴史をとじようとしています。

当時（昭和26・7年）の図書館は河原町通りに面して
いる大学院研究科の3階（現在の学園ホール）にありま
した。敗戦後のことでもあり、現在のように、新築、増
築ラッシュという状態ではなかった中で、この建物は新し
く建設されました。戦後の新しい学園づくりをめざす立
命館にとっては新築第1号ではないかと思えます。

当時の図書館は収容人数250名、館長、課長を含めて
館員わずか10数名が、おのおのの部署にわかれて仕事
をしていました。現在の衣笠図書館とはその比ではあり
ませんが、何をしても家族的雰囲気でもありませんか
そんなものが感じられたように思いました。

図書館を利用する学生も、当時はまだ兵隊がえりの学
生も多く服装にしても軍服の改造したものを着たり、
学生カバン（今のスポーツバッグ？）にしても軍用カバン
を使っている人達もかなりいたように思います。また大
学院研究科の階上に図書館があった関係から大学院生の
利用が大へん盛んでした。院生の中には兵役の経験者も
何人かおられ、図書利用のかたわらさまざまな人生経
験を聞かせてもらったり、人生論に耳を傾けたものです。
また現在のようにコピーやゼロックスというような事務
機能もなく図書を写すときなど、書き写しの方法しなかつ
たことなど、出納の仕事をおぼえています。

もう一つのなつかしい思い出は、日本ではじめての独
立プロダクション映画「雲流るるはてに」監督家城喜代
治（故人、この監督は戦後の新しい民主映画作りをはじ
めた人）主演、鶴田浩二、木村功のロケーションが、図
書館内で行なわれました。映画のストーリーは学業中途
にして大空のはてに散った若き学徒兵の物語で、館内
での撮影は学生生活を学徒兵が回想するシーンで、ボンヤ
リと探照灯のうす暗い書庫内の和漢書をカメラが映し

回転音をたて、撮影したのも昨今のように思い出します。
数々の思い出をのこして広小路もやがてその幕をおろそ
うとしています。さようなら—広小路キャンパス。



右、筆者

戦後の図書館から新図書館へ

(1945—1967)

1945（昭和20）年11月、末川博士が学長に就任し、
戦後の学園の基礎固めが開始された。同年立命館文庫は
「立命館図書」となり、さらに1947（昭和22）年4月
には「立命館大学図書」と改称された。この間に午後
8時までの開館時間の延長、図書分類法として日本十進
分類法（訂正増補5版）の採用、衣笠学舎に「理工学生
図書室」の開室などが行なわれている。

1948（昭和23）年4月新制大学の認可により各学科は
法・経・文の3学部で拡充され、翌年の理工学部の増設
により4学部を有する総合大学へと発展して行くのであ
る。（これに伴って1949年10月理工学部分館設置）

1948年10月には全学所蔵図書を総合した事務用カード
目録、著者、書名、分類の閲覧用カード目録の編成がは
じめられた。

1950（昭和25）年創立50周年を契機に新制大学の諸機
構、教育条件の整備が全学的課題となり、10月には大
学院校舎が完成した。その3階を図書施設として使用す
ることが決まり、11月に移転開館の運びとなった。開館
式にあたって末川総長は「…250席を有する大学図書館
として面目を一新した」旨の祝詞を述べ、全学園関係者
が永く渴望していた新図書館落成を迎えて、その期待と
喜びは大変なものであったことが想像される。

1951（昭和26）年には古くなった図書館規程を全面的
に改正し、図書分類法を日本十進分類法（新訂6—A版）
に改め、開館時間を前期試験期には午後9時30分まで延
長することになった。またこの年にカード目録排列規則
が制定された。



図書館事務室（1951年頃）

1952（昭和27）年5月研心館の新築工事が着工され、
研心館と典書館（現書庫）が煉瓦式工法により連結され
た。これによって4、5階部分に書庫が増設されること
になった。

翌年4月研心館2階へ新図書館が移転し、6月には開
館時間が午後8時30分まで延長された。また、同年8月
には新しい図書館にふさわしい事務組織の改革が行なわ
れ、副館長制、2課制（運営・整理）、4係制（管理・開
覧・受入・整理）が施行された。



典書館書庫

1954（昭和29）年9月当時の大学図書館としては画期
的な開架閲覧制が採用され、現在の広小路学舎図書館分
館の開架閲覧室の歴史の始まりとなった。これにより、
閲覧学生数は1日500名を超え、東京大手私大における
利用数をはるかに上回る結果となった。

1956（昭和31）年10月には図書選択委員会が発足し、
同時に図書選択に関する内規を制定した。

1957（昭和32）年には末川総長からの寄贈図書による
「末川文庫」、1959（昭和34）年には本学教職員・校友の
著書および立命館出版部、京都印書館発行の出版物をコ
レクションとする「立命館文庫」の2つの特殊文庫が創
設された。

1959年7月には戦後初めての欠本調査を実施した。夏
期休暇中の暑いときに行なわれたこともあって、図書館



大閲覧室（1953年頃）

ゼミ訪問記 ③

産業社会学部3回生 鈴木ゼミ



連載第3回目を迎え、今回は1ページまるごと使
って紹介します。産業社会学部3回生の鈴木ゼミにおじ
やました。「15年戦争下の京都と文化財の保存」と
いうテーマで26人が1年間活動を続けた成果を、資料集
として出版する運びとなっています。その原稿が出来る
までの一年を、まず先生に伺いました。

ゼミテーマの下には大きく3本の柱をたてたそうです。
ひとつは河原町に原爆が落ちなかったのか、次に第二
時大戦中の京都の文化財はどんな状態だったのか、そし
て戦後アメリカの占領政策と京都の文化財について、こ
れを更にゼミ生が分担し、調査して資料を集めます。「日
本にある関係者は全部みた」と言えるくらいによく調べ

良かった事など先生には満足のいくゼミにな
ったようです。

学生諸君からは、テーマは最初先生から出
されたものであまりやる気はなかったけれど、
やってみると興味も湧き、ひとつのテーマ
に対して全員が一丸となって取り組み最後に
ひとつのものが出来あがったのはとても有意
義だったと打ち明けたゼミ生もいた、という感想が寄せ
られました。とりわけ聞き取り調査は、事前に依頼の葉
書を出しても返事のないところが多く、また、当時を知
る人が少ないなど苦労が多くて、話を聞きに行く
だけでも大変だったと思うけれど聞いた後は「

東京にて西園寺展開催一大きく成功

去る10月11日～16日まで、東京高島屋におい
て本学主催による「最後の元老 西園寺公望展
—京都・パリ・東京—」が開催されました。
この「展示会」は、本学園の創始120周年・
創立90周年記念行事の一環として、また、本学
西園寺公望伝編纂室が研究成果の一部を発表す
る場として開催されたものです。なお、「西園寺
公望伝」(全4巻、別巻2のうちの第1巻)と
同日に刊行されました。



「展示会」当日

文書情報整理元年

～「パリ講話会議資料コレクション」のレーザーディスク入力にあたって～
図書館長 佐藤 智三（経営学部教授）

現在、朝鮮人慰安婦問題が大きくクローズ
アップされてきている。その背景として、戦時
中、軍の命令を示す文書の発掘が、極めて重要
な役割を果たしている。古ぼけた僅か1枚の書
類が歴史の見方を変え、さらにそれが契機となっ
て政治経済の方向が大きく変わっていくことさ
えある。

東ドイツソ連の崩壊とともに、国家警察の
極秘文書の公開が、徐々に進められている。し
かし、政治情勢が困難ななかで、このような重
大な文書類が散逸されることのないことを願う
のは、研究者として共通した気持ちだろうと思
う。このような世界的趨勢のなかで、アメリカ
のCIAも、その資料の一部を公開せざるを得
なくなってきた。わが国でも地方自治体の

で整理された文書類に接すると、欧米の高い研
究水準を支えているものは何か、その一端を垣
間みる思いがする。

昨年訪れた、ミュンヘンの「戦争関連文書
館」は、以学館ほどの容積をもった建物に、ぎっ
しり文書が詰め込まれている。ここでは2名の
研究員と数名の職員が、整理とレファレンス・
サービスを担当しているが、整理の手順が確立
しているせいか、雰囲気は比較的のんびりして
いる。調べたいテーマを申し出ると、翌日には
100枚ぐらいを項目別にボール紙で包み、ひも
で縛った文書を棚に並べておいてくれる。われ
われは、タイプで打たれているが、何枚か重ね
て打たれているために活字がぼけている書類を、
1日中、1枚1枚読んでいくが、最終的に利用

開館時間・開館日数を大幅に拡大!

図書館の開館時間について、本年4月1
日より利用条件の大きな改善を実施しまし
た。開講期間中平日の開館時間を9:00～
21:30に、定期試験期間中の平日を8:40
～21:50に時間延長を行いました。夏季・
冬季・春季休暇中についても平日の開館時
間を延長して9:30～19:30に統一しまし
た。また、従来休館としていた大学の休業
期間中（ゴールデンウィーク期間の祝祭日
を除く6日間・夏季一斉休業期間の8月13
日～16日を除く10日間・年末年始休業期間
の12月29日～1月3日を除く4日間）の延
べ20日間を増加して開館します。
本学で学ぶすべての利用者のために、図書

館では教学改革、セメスター制の実施、学
校6日制・授業週5日制などの学習構造の
変化に対応する図書館づくりと利用条件の
改善の一つとして、開館時間の延長と開館
日数の増加を実施するものです。
学生諸君が図書館を大いに利用して、学
習や研究に生かされることを期待していま
す。

1996年度 図書館の開館時間

	開講期間中	定期試験期間中	夏季・春季休暇中
月～金	9:00～21:30	8:40～21:50	9:30～19:30
土・日	10:00～17:00	10:00～17:00	10:00～17:00

1996年4月 第74号

1988年3月 第42号

1990年11月 第52号

1992年4月 第58号

立命館大学図書館100年のあゆみ

西暦年(元号)	図書館施設	図書館サービス	大学のできごと
1869(明治2)			西園寺公望、邸内に私塾「立命館」を開く。
1900(明治33)			中川小十郎「私立京都法政学校」設立。
1904(明治37)			専門学校令による「京都法政大学」設立。
1905(明治38)	附属施設として図書室・書庫建設。(注1)	図書受入業務開始。	西園寺公より「立命館」の名称継承の許諾を受け、大扁額を賜る。
1913(大正2)			財団法人立命館設立。 大学を「私立立命館大学」と改称。
1922(大正11)			大学令(旧制)による「立命館大学」に昇格。
1923(大正12)		図書分類表を制定し、専任の図書館員をおく。 文庫長:跡部定次郎。	
1924(大正13)	書庫新築。(注2)		
1925(大正14)	図書館を改め「立命館文庫」設立。		
1926(大正15)	立命館文庫第2期工事完成。「養性館」(後「興学館」と改称)竣工。		
1931(昭和6)		夜間開館実施。	
1933(昭和8)			京大滝川事件により元京都帝国大学教授、助教授17氏を本学に招聘。
1937(大正12)	「西園寺文庫」創設。(注3)		
1938(昭和13)			「立命館高等工科大学」設立。
1939(昭和14)			立命館高等工科大学を「立命館日満高等工科大学」と改称。
1940(昭和15)	小泉荃三氏より歌書2,423冊、雑誌1,056冊受贈。 (後年「白楊荘文庫」となる)(注4)		
1941(昭和16)			国防学研究所設置。

(注1) 今年、図書館は創立100周年を迎えます。

(注2) 当時の建物は延べ357㎡でした。現在の衣笠図書館の総面積は当時の面積の約23.8倍、8530.46㎡です。

(注3) 西園寺文庫は西園寺家伝来の資料、公望自身が収集した資料、公望宛寄贈された資料、後日、本学が補充購入した資料からなります。図書・逐次刊行物のほか、書簡などの文書も含まれています。

(注4) 白楊荘文庫には、小泉荃三教授が収集した歌集および関連する新聞・雑誌類を中心に、図書館が追加収集した資料を加えた4600余点が納められています。明治・大正から昭和20年代までの資料が体系的に収集され、このコレクションを基礎として執筆された「明治大正短歌史料大成」は当文庫の解説書でもあります。与謝野晶子・鉄幹の著書や、「明星」「スバル」など近代文学研究にとって貴重な資料が含まれています。



蔵書印



立命館文庫の銅版



立命館文庫時代の蔵書印



西園寺文庫銅版

西暦年(元号)	図書館施設	図書館サービス	大学のできごと
1942(昭和17)		全国私立大学図書館協議会に加盟。 加古祐二郎氏旧蔵法律書7,181冊受贈。(注5) 「加古文庫」創設。	
1945(昭和20)	立命館文庫を「立命館図書館」と改称。	立命館文庫規則を改正し、「立命館図書館規程」制定。	立命館研究所設置。
1946(昭和21)		開館時間を午後8時まで延長。	立命館土曜講座発足。
1947(昭和22)	立命館図書館を「立命館大学図書館」と改称。		
1948(昭和23)			学校教育法による「立命館大学」(新制)設置。 法、経済、文三学部をもつ新制の総合大学として発足。(広小路) 立命館研究所を立命館大学人文科学研究所に改組。
1949(昭和24)	理工学部分館設置。		理工学部設置。
1950(昭和25)	大学院校舎3階へ移転。		大学院設置。(法学・経済学・文学研究科)
1951(昭和26)		立命館大学図書館規程制定。	
1952(昭和27)	研心館と書庫を曳家式工法により連結。書庫4、5階増設。		
1953(昭和28)	研心館2階へ移転。	開館時間を午後8時30分まで延長。	
1954(昭和29)	開架自由閲覧室開設。(注6)		
1955(昭和30)			理工学研究所設置。
1957(昭和32)	「末川文庫」創設。(注7)		
1959(昭和34)		「立命館文庫」(本学教職員・校友著書および立命館出版部・京都印書館刊行物のコレクション)創設。	
1961(昭和36)		「図書館たより」(読書調査)発刊。	

(注5) 加古祐二郎教授は、1937年に33歳の若さで永眠されましたが、正味5~6年と言われる短い研究生活の中で精力的に研究しその成果を発表しておられました。先生の蔵書は、専門であった法哲学関係の文献の他、国家論・政治学・社会学など各分野の優れた資料が集められていました。本学に寄贈されたこれらの資料が「加古文庫」として保存されています。

(注6) 現在は当たり前になっている開架閲覧制は、この当時大学図書館としては画期的な制度でした。閲覧学生数は1日500名を超え、当時の東京の大手私大の利用者数をはるかに上回っていました。

(注7) 末川博名誉総長の蔵書1万2千余点を所蔵しています。ここには、末川博先生の全著作はもちろん、大正から昭和期の民法学の著作・逐次刊行物・末川先生の手稿類・遺品なども納められています。また、洋書の中には留学中に入手された貴重な古書も含まれています。

閲覧室



広小路学舎の図書館(興学館)



白楊荘文庫資料



西暦年(元号)	図書館施設	図書館サービス	大学のできごと
1962(昭和37)		開館時間を午後9時まで延長。	経営学部設置。
1965(昭和40)	理工学部分館を「衣笠学舎分館」と改称。		経済・経営学部衣笠学舎に移転。 産業社会学部設置。
1966(昭和41)			経営学研究科設置。
1967(昭和42)	衣笠学舎に新中央図書館竣工。(注8)立命館大学図書館本館となり、広小路学舎分館発足。	逐次刊行物総合目録(第1部)発行。	
1970(昭和45)			産業社会学部衣笠学舎に移転。
1972(昭和47)		開館時間を午後9時40分まで延長。(広小路分館)	社会学研究科設置。
1973(昭和48)		試験期の日曜開館実施。	
1974(昭和49)		「図書館だより」創刊。(注9) 小集団貸出制度実施。	
1975(昭和50)		広小路学舎分館に身体障害者施設及び点字図書設置。	
1977(昭和52)	3階閲覧室完成。(衣笠本館)	逐次刊行物総合目録(第2部)発行。	
1978(昭和53)		日曜開館実施。(衣笠本館)	文学部衣笠学舎に移転。
1981(昭和56)	広小路分館閉鎖。 書庫完成。視聴覚室設置。		法学部衣笠学舎に移転。衣笠一拠点化完了。
1983(昭和58)		「白楊荘文庫目録」刊行。 図書館年次報告刊行。	
1984(昭和59)		「立命館大学漢籍分類目録」刊行。	
1986(昭和61)		貸出管理電算化システム稼働。(注10) 前期試験期貸出実施。	
1987(昭和62)		後期試験期貸出実施。 「立命館大学所蔵逐次刊行物総合目録 和文編」刊行。 「立命館大学図書館蔵原随園博士蔵書目録」刊行。	

(注8) 現在の図書館です。1・2階が閲覧室となっていました。

(注9) 図書館業務の現状や施策・課題などを大学構成員に的確かつ敏速に周知・徹底することを目的に刊行されました。

創刊号に紹介されている各分野の「よく読まれている図書」のNo.1は次の3冊です。

- 松本清張全集(人文科学分野)
- 経済学(上)/サムエルソン、D(社会科学分野)
- 真空管工学/笹男利男(自然科学分野)

(注10) 利用者カードと貸出資料をカウンターに提出して貸出手続きをするという方法になりました。このシステム導入までは、借りたい本1冊ごとに図書番号や学生証番号の記入が必要でしたので、貸出手続きが大幅に簡略化され、利用しやすくなりました。



この扁額は、図書館の新築の際に末川元総長が揮毫されたものです。学問に始めはあっても終わりはないと言われているように、読書を通じて知ることの如何に多いことか、またそのことによって自らの足らざるを知ること一層大きいことを、謙虚に自覚しなければならないと教えたものです。

特別コレクションの目録



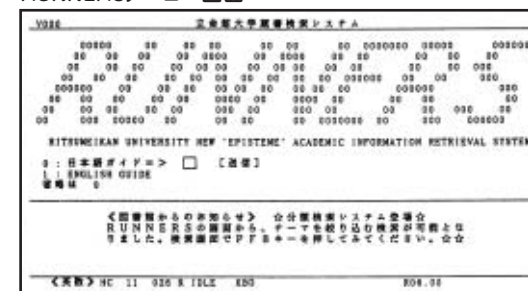
西暦年(元号)	図書館施設	図書館サービス	大学のできごと
1988(昭和63)			国際関係学部設置。 国際地域研究所設置。
1989(平成元)		NACSIS-IRサービス開始。 CD-ROM(J-BISC、CD-HIASK等)サービス開始。	国際言語文化研究所設置。
1990(平成2)	図書館改修。	RUNNERS(立命館大学学術情報システム)稼働。 (注11) カード目録凍結。 「末川文庫目録」刊行。 「立命館大学図書館蔵西園寺文庫目録」刊行。	教育科学研究所設置。
1992(平成4)			国際関係研究科設置。 国際平和ミュージアム設置。 「旧米国マルクス主義研究所所蔵目録」刊行。
1993(平成5)		父母教育後援会会員への図書館開放。 パリ講和会議資料コレクションのデータベース化完成。 5月運用開始。 図書館の地域公開開始。 外国雑誌コンテンツ検索システム稼働。	
1994(平成6)	BKCメディアセンター設置。(注12)		理工学部 BKCへ拡充移転。 政策科学部設置。
1995(平成7)	マルチメディアルーム開室。(衣笠)学術館地下に書庫設置。		
1996(平成8)		RUNNERS II 稼働。 開館時間延長(午後9時30分)・開館日増。(衣笠)(注13)	
1997(平成9)		図書館、メディアセンター、研究部共同研究事務室、総合情報センターの統合再編による(新)総合情報センター発足。	政策科学研究科設置。

(注11) 書名の一部や著者名などのてがかりがあれば、全学の所蔵状況を検索できるようになりました。スタート時のデータは図書9万件、雑誌・年鑑2万1千タイトルでしたが、2005年現在では、図書は約180万件、雑誌・年鑑は約4万タイトルのデータを収めたデータベースとなっています。

(注12) 理工学部の拡充移転に伴い、BKCにメディアセンターが完成しました。全面開架方式のため、見たい資料をすぐに見ることができます。

(注13) 従来休館としていた大学の休業期間中も、開館日を大幅に増やしました。図書館では、教学改革・セメスター制の実施・授業週5日制などの学習構造の変化に対応し、学習や研究を支えています。

RUNNERSメニュー画面



メディアセンター



西暦年(元号)	図書館施設	図書館サービス	大学のできごと
1998(平成10)	BKCメディアライブラリー開設。	BKC情報サービス課発足。 メディアセンター開館時間延長。(午後8時)	BKC新展開。(経済・経営学部BKCへ移転) 社会システム研究所設置。
1999(平成11)	図書館1階にオープンパソコンルーム設置。(パソコン120台)	コアデータベースの提供サービス開始。(注14)	
2000(平成12)	APUライブラリー開館。 メディアセンター1F新聞・雑誌閲覧室拡張。	RUNNERSⅢ稼働。 開館時間を午後10時まで延長。(衣笠)	立命館アジア太平洋大学開学。 教育科学研究所を名称変更し、人間科学研究所設置。
2001(平成13)	リサーチ・ライブラリー開設。(修学館1階共同閲覧室拡充)	RUNNERSデータベースの全機能学外公開。 レファレンスライブラリアン配置。 教員に対するコピーサービス開始。 総合情報センターホームページ英語版公開。 修学館・人文系文献資料室の土曜開館実施。 学生ライブラリースタッフ導入。	応用人間科学研究所設置。
2002(平成14)		開講期における図書館及びBKC各館の月末終日閉館を午後より開館に変更。	

(注14) インターネット時代に対応して、学習・教育・研究と密接に関連する学術情報データベースの無料提供を開始しました。

メディアライブラリー



修学館リサーチライブラリー



ライブラリースタッフ



西暦年(元号)	図書館施設	図書館サービス	大学のできごと
2003(平成15)	各館オープンパソコンルームのパソコン全台更新。 図書館閲覧室座席240脚更新。 図書館グループ閲覧室にプラズマディスプレイ配備。 図書館改修工事。(注15)	新たな情報リテラシー授業開始。 RAINBOWガイドと図書館各案内(データベースガイドブック、衣笠編、BKC編)を「RAINBOWガイド」として1冊に統合。 「立命館アカデミア@大阪」に対する相互利用開始。 京都橘女子大学図書館と相互利用協定締結。 付属高校等に対する利用者サービス拡大。 文学部司書課程受講者の図書館実習受入実施。	言語教育情報研究科・先端総合学術研究科設置。
2004(平成16)	ローライブラリー開設。 修学館1階・3階・5階、洋館5階に貸出手続確認装置設置。 メディアセンター自動化書庫稼働。	RUNNERSⅣ稼働。(注16) 全学リコール制導入。 学術情報施設利用規則および同施行細則施行。(注17) RUNNERS携帯電話サービス開始。	法務研究科(法科大学院)開設。 情報理工学部設置。

(注15) 各階のトイレを改修し、全館のカーペットを新しくしました。また、閲覧座席(1,460席)の椅子も入れ替えました。

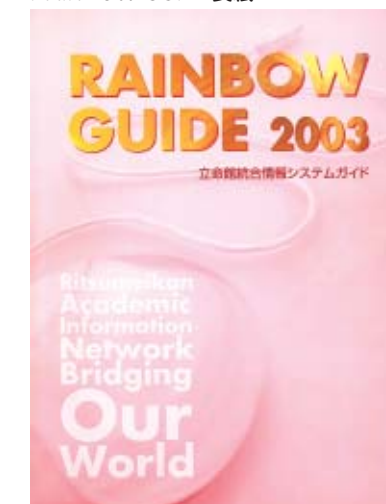
(注16) 新システム導入と同時にMyLibraryも導入し、Webでの貸出延長や電子ジャーナルの検索、横断検索などが可能となりました。

(注17) リコール制度や、学部学生に対する研究図書館外貸出などを実施しました。

オープンパソコンルーム



RAINBOW GUIDE表紙



自動化書庫



立命館大学図書館 歴代館長一覧

年度	和暦	役職名	氏名	備考	役職名	氏名	備考
1923	大正12	文庫長	跡部 定治郎				
1924	大正13	文庫長	跡部 定治郎				
1925	大正14	文庫長	跡部 定治郎				
1926	大正15	文庫長	和田 三良				
1927	昭和2	文庫長	和田 三良				
1928	昭和3	文庫長	跡部 定治郎				
1929	昭和4	文庫長	跡部 定治郎				
1930	昭和5	文庫長	跡部 定治郎				
1931	昭和6	文庫長	跡部 定治郎				
1932	昭和7	文庫長	跡部 定治郎				
1933	昭和8	文庫長	跡部 定治郎				
1934	昭和9	文庫長	黒田 寛	1934.1就任			
1935	昭和10	文庫長	磯崎 辰五郎				
1936	昭和11	文庫長	大岩 誠				
1937	昭和12	文庫長	大岩 誠	1937.12退任			
1938	昭和13	文庫長	和田 三良	1937.12就任			
1939	昭和14	文庫長	和田 三良				
1940	昭和15	文庫長	和田 三良				
1941	昭和16	文庫長	和田 三良				
1942	昭和17	文庫長	熊谷 八十三	1942.3退任			
1943	昭和18	文庫長	熊谷 八十三	1942.3就任			
1944	昭和19	文庫長	熊谷 八十三	1945.2.1退任			
1945	昭和20	館長*1	竹田 直平	1945.1.31就任			
1946	昭和21	館長	竹田 直平	1946.5退任			
1947	昭和22	館長	天野 利武	1946.6就任			
1948	昭和23	館長	天野 利武	1947.1退任			
1949	昭和24	館長	平田 隆夫	1947.1就任			
1950	昭和25	館長	平田 隆夫	1951.1退任	分館長(衣笠キャンパス)*2	増野 肇	1949.10.就任
1951	昭和26	館長	淡川 康一	1951.1就任	分館長	増野 肇	
1952	昭和27	館長	淡川 康一		分館長	浅井 潔	1951.6就任
1953	昭和28	館長	淡川 康一	1953.4退任	分館長	浅井 潔	
1954	昭和29	館長	山元 一郎	1953.4就任	分館長	浅井 潔	
1955	昭和30	館長	山元 一郎		分館長	橋本 次郎	1956.5退任
1956	昭和31	館長	山元 一郎	1956.7退任	分館長	橋本 次郎	1956.6就任
1957	昭和32	館長	井上 次郎	1956.7就任	分館長	田中 正三郎	
1958	昭和33	館長	井上 次郎	1958.12退任	分館長	羽村 二喜男	
1959	昭和34	館長	巖田 久規	1958.12就任	分館長	羽村 二喜男	
1960	昭和35	館長	巖田 久規	1960.9退任	分館長	遠藤 外雄	
1961	昭和36	館長	三田村 泰助	1960.10就任	分館長	武田 英吉	
1962	昭和37	館長	三田村 泰助	1962.8退任	分館長	武田 英吉	
1963	昭和38	館長	浅井 清信	1962.9就任	分館長	深川 俊男	
1964	昭和39	館長	浅井 清信	1964.4退任	分館長	深川 俊男	
1965	昭和40	館長	武藤 守一	1964.4就任	分館長	村上 一男	
1966	昭和41	館長	武藤 守一		分館長	村上 一男	1967.9退任
1967	昭和42	館長	国崎 望久太郎		分館長	村上 一男	1967.10.就任
1968	昭和43	館長	国崎 望久太郎		分館長(広小路キャンパス)*3	大西 芳雄	
1969	昭和44	館長	建林 正善		分館長	大西 芳雄	
1970	昭和45	館長	建林 正善		分館長	大西 芳雄	
1971	昭和46	館長	井上 晴丸		分館長	奥村 三舟	
1972	昭和47	館長	井上 晴丸		分館長	奥村 三舟	
1973	昭和48	館長	池田 誠		分館長	和田 繁二郎	
1974	昭和49	館長	池田 誠		分館長	和田 繁二郎	
1975	昭和50	館長	野久尾 徳美		分館長	福田 晃	
1976	昭和51	館長	空席	1975.4.1～11.25	分館長	和田 繁二郎	
1977	昭和52	館長	和田 繁二郎	1975.11就任	分館長	和田 繁二郎	
1978	昭和53	館長	和田 繁二郎		分館長	井戸田 侃	
1979	昭和54	館長	岡崎 栄松		分館長	宮地 國敏	
1980	昭和55	館長	岡崎 栄松		分館長	井上 正三	
1981	昭和56	館長	杉田 嘉一郎		分館長	山下 健次	
1982	昭和57	館長	杉田 嘉一郎				
1983	昭和58	館長	古川 勝弘	1983.5退任			
1984	昭和59	館長代行	杉田 嘉一郎	1983.5就任 1983.9退任			
1985	昭和60	館長	奥田 修三	1983.9就任			
1986	昭和61	館長	奥田 修三				
1987	昭和62	館長	後藤 靖				
1988	昭和63	館長	後藤 靖				
1989	昭和64	館長	明石 外世樹	1988.1退任			
1990	平成元年	館長	戸木田 嘉久	1988.1.29就任(副学長の兼務)			
1991	平成2	館長	菅沼 良治				
1992	平成3	館長	西川 富雄				
1993	平成4	館長	西川 富雄	1990.7退任			
1994	平成5	館長	衣笠 安喜	1990.8就任			
1995	平成6	館長	佐藤 智三				
1996	平成7	館長	佐藤 智三		メディアセンター長*4	大野 豊	
1997	平成8	館長	中井 美雄		メディアセンター長	深海 浩	
1998	平成9	館長	中井 美雄		メディアセンター長	深海 浩	
1999	平成10	館長	久岡 康成		メディアセンター長	深海 浩	
2000	平成11	総合情報センター副センター長(学術情報担当)*5	佐藤 喜一				
2001	平成12	総合情報センター副センター長(学術情報担当)	佐藤 喜一				
2002	平成13	総合情報センター副センター長(学術情報担当)	大戸 千之				
2003	平成14	総合情報センター副センター長(学術情報担当)	大戸 千之				
2004	平成15	総合情報センター副センター長(学術情報担当)	大瀬戸 豪志				
2005	平成16	館長	水口 憲人				
2006	平成17	館長	水口 憲人				

*1 立命館図書館に名称変更
 *2 衣笠学舎に「理工学部分館」設置
 *3 衣笠学舎に「中央図書館」完成。広小路図書館は分館となる。
 *4 びわく・くさつキャンパスへ理工学部拡充・移転にともない、メディアセンター設置
 *5 総合情報センターに再編統合。図書館・修学館・人文系文献資料室・メディアセンター・メディアライブラリーを統括。

寄稿ページ

図書館 100 周年に寄せて

水口憲人



マルクスは、大英博物館の図書館を活用して『資本論』を書いた。イギリスの工場労働者の状態に関する豊富な資料や、参照すべき多くの文献を彼に提供したこの図書館は、定職や研究室のなかった彼にとっての不可欠の施設であった。そして現在、彼の『資本論』は世界の多くの図書館に所蔵されている。

『広辞苑』は図書館を「図書・記録その他の資料を収集・整理・保管し、必要とする人の利用に供する施設」とする。だがこのようなありきたりの説明は、図書館が、「図書・記録その他の資料」が社会の共有財産であるという思想の上に作られた制度であるということうまく伝えない。図書館は、知識や情報を社会化するシステムであり、それらが特定の個人や集団に独占されてはならないという理念に立脚した仕組みである。私が辞書の執筆者なら、このような内容や「人間が作りだした優れた仕組みの一つ」という語句を付け加えたかもしれない。この仕組みがあったからマルクスは『資本論』が書けたし、1世紀以上前の彼の著作に、私たちは現在でも接することができるのである。

研究や教育は開かれた営みである。特定の人間にしかアクセスが許されないような情報を基礎にした研究は、どこか歪みを伴うだろうし、この種の特権的な条件が一般化されれば、研究自身の発展や進歩が止まってしまう。教育も研究の開かれた性格をベースにして成り立つ。とりわけ、人類が生みだしてきた知見が蓄積・整理され新たに加工・生産される大学という現場での教育は開かれていなければならない。知識や情報を共有化することによって開かれたものにする図書館という仕組みは、研究と教育のこのような性格と結びついているし、それらを支えるインフラである。

『広辞苑』がいうように、インフラが機能するためには「収集・整理・保管」という共有化の手だての具体的工夫が必要である。先人たちは、人類が蓄えてきた知識を十進分類で整理する方法を編み出したし、カードシステムという検索方法を開発してきた。これらの工夫は、知識が社会的に組織されていく歴史の足跡でもあった。そして現今、組織化の環境は大きく変化しつつある。印刷物に代わるデジタル情報が比重を増し、今後、その傾向はますます強まるものと予測される。わが「RUNNERS」のように電子化され便利になった検索システムは、カードシステムの影を次第に薄くしている。さらに、情報化と国際化が手を携え、「収集・整理・保管」すべき資料の量を飛躍的に拡大し、質も多様化してきている。インフラはユーザー・フレンドリーでなければならないが、環境の変化は、ユーザー・フレンドリーの新しい工夫を求めている。

I・イリイチは、学校は人間をダメにするが図書館は賢くするという(『脱学校の社会』)。画一化された知識を強制的に詰め込む学校に対して、図書館は、知識の宝庫に主体的に向き合う態度を培うからだという。教育に携わる者の一人として、学校が人間をダメにするという意見にはにわかに賛成しがたいとしても、彼は図書館の役割を巧みに表現している。私たちが賢くしてきてくれた立命館大学図書館は100歳を迎える。情報化や国際化の新しい段階に遅れを取らず、また学生生活や研究活動の多様化に対応した図書館として有機的变化を遂げることに、これが、101歳以降へ向けての当面の課題だと考えている。

みずぐち のりひと

立命館大学法学部教授。専門分野は、行政学・地方自治論。

2003年4月から図書館長。

立命館大学図書館の思い出

中井美雄



立命館大学図書館が開設100年を迎えるということからすれば図書館長として業務に携わったのは僅かな期間であったが（1995年4月から1997年3月）、今思い返してみると、この間に図書館に関連して随分と政策的な展開があったように思う。「第五次長期計画の具体的な推進について」と題する常任理事会文書（1996年6月）によって長期計画の具体的課題の一つとして図書館政策の検討が提示され、その答申文書作成の作業に取り組んだこと、また、日常的な業務としても、図書購入方式の改革、図書業務の集中化、業務委託などの図書業務改革、利用者サービスの向上に向けての休日の図書館の利用体制の確立、相互利用の充実などの情報サービス業務の改革、BKCへの経済・経営両学部の移転に伴う施設計画の確立や移転図書選定・収書方針・補充図書収書方針の策定、図書保存方針の確立など、図書館業務の基幹に関わる作業にかなりのエネルギーを費やしたことが想起される。また、全国的な動きとして大学図書館における電子図書館的機能の充実・強化がいわれ、学術審議会などを中心に報告・建議文書が公にされると言う状況があり、また、私立大学図書館協会が中心となって、その総会で「新私立大学図書館改善要綱」が採択されるなどの状況が生まれていた。

丁度、大学の研究・教育機能に対する社会的要請の内容も変化を遂げつつあり、学術情報はますます量的に増大し、質的にも高度化・多様化し、国際的連結を強めつつあった時期でもあった。そのことは、当然、大学図書館のあり方に、好むと好まざるに関わらず、大きな影響を及ぼしたことは否定できない。大学図書館は、学生や教職員の教育・研究活動に不可欠な情報への接近に的確・迅速に対応しうる学術情報の収集・集積・創出・発信機能の飛躍的展開を要請されるようになる。大学図書館であっても、地域も含めて、学術情報の創出・発信機能の強化がいわれ、そのための人的・物的体制の充実が特に強調された時期でもあったように思われる。

それからもう10年も経ち、この10年間での立命館の著しい発展の中で、図書館も、大学内外における学術情報センターとして、より一層の充実・発展を遂げていることを心ひそかに喜んでいる。過去、図書館は大学においてはシンボリックな位置を占めてきたように思う。例えば、各大学で何か大きな節目を迎えると、記念事業の一環として立派な図書館が造られ、教育・研究機関の象徴的役割を果たしてきた。しかし、今日では、学術情報センターとしてのダイナミズムに重きが置かれていることは否定できないであろう。一利用者としての立場から言えば、様々の媒体を通じて、必要なときに、必要な情報が的確に入手できる、そのための人的・物的条件が整備されているということが、図書館の存在に対する安堵感・信頼感をもたらすものであると思っている。学生や教職員、あるいは広く市民のための学術情報センターとして、その存在感を示してもらいたいと念じている。開設100周年に際しても、なお一層その思いは強くなるばかりである。

なかい よしお

立命館大学名誉教授。専門分野は、民法・民事法学。

1995年4月から1997年3月まで、図書館長。

立命館大学図書館開設100周年

大戸千之



立命館大学図書館が開設100周年を迎える。多くのかたがたの苦心努力によって、発展充実の道を歩んできたことは、よろこびにたえない。

図書館が大学の象徴であることは、昔も今も変わらない。充実した図書館を持たない大学は、その力量を疑われてもしかたがないといえる。ただし、図書館のありようは昔と今ではずいぶん変わってきており、図書館の充実とは何を意味するかという問題も、簡単に論じることがむずかしくなってきた。

長い間、図書館とは書物を収蔵して閲覧に供する場所にほかならず、図書館評価の基準はなによりも蔵書数の多さであった。そうした評価基準が今日まったく意味を失ったわけではないけれども、現在の大学図書館は、あらゆる情報媒体によって教員・学生に研究・学習の便宜を提供する組織・場として、存在意義を問われるようになってきている。提供を期待される便宜は、テクノロジーの進歩によって多面的となり、しかも変化してやまない。わたしなどにとって感慨深いのは、その変わりようのやささである。

すぐ昔話をしたがるのは年をとった証拠らしいのだが、わたしの学生時代（30年前のことである）、身近な図書館で読める本はきわめて限られていた。勉強に必要な本はなけなしの財布をはたいて買うのがあたりまえと考えられており、品切れや絶版の本は、こまめに古書店を訪ね歩いて探し、幸運な出会いを待った。それは、出版される書物の数が、まだきわめて少なかったからでもあった。遠方をふくめて、あちこちの図書館にあたることもしたが、収蔵されているかどうかは行ってみなければわからず、収蔵されていても、その場で読んでノートをとるしかなかった。

それと比較した現在の状況を、あれこれ述べる必要はないであろう。今昔の感というほかはない。各国の雑誌論文やPh.D.学位論文が実に容易に読めるようになったという一事だけでも、わたしには不思議な気さえするのである。

変化は急激であった。図書館にとって所蔵資料の急増は深刻な問題だが、コンパクト化の方法として期待されたマイクロフィルムはマイクロフィッシュにとってかわられ、さらにCD-ROMがこれにかわった。映像資料の媒体は短期間にビデオテープからレーザーディスクへ、さらにDVDへと移行した。パソコンのためのコネクター配備を進めているうちに、無線ランが台頭してきた。データベースが加速度的にふえた。長期的な展望でもって図書館の整備充実を考えることがいかにむずかしいか、あらためて思わざるをえない。

そうしたむずかしさは、今後いっそう増大していくであろう。さきごろには、インターネット企業の最大手が、オクスフォード、ハーヴァード、スタンフォードなど有力大学図書館の蔵書の電子化に乗り出し、ネットで閲覧できるよう準備している、との報道があった。図書館をめざして渡航し、いささかわずらわしい資格手続きをすませ、閲覧を申し込んで長い時間待ち、やっと目的の書物と対面する、そうした経験をもつものには溜め息の出る話である。

有力図書館蔵書の電子化が進むなら、一般図書館は最近刊の書物のみを収蔵し、古くなった書物はどんどん廃棄することになるのだろうか。研究機関としての大学図書館は、自力で膨大な蔵書を蓄積しようとするをやめ、他所にはない珍書稀覯本や、散失の危険にさらされている諸資料を、それぞれの意思と責任において収集保管し、ひろく閲覧に供することによって、応分の社会的役割をはたそうとするようになるのだろうか。

大学図書館の将来を予測することは、わたしなどにとっては、心楽しいようでもあり、またこわいようでもあることに思えてくるのである。

おおと ちゆき

立命館大学文学部教授。専門は、古代ギリシア史・ヘレニズム時代史。

2000年4月から2002年3月まで、総合情報センター副センター長（学術情報担当）。

末川博先生の蔵書受入と立命館出版部のことなど

西岡成幸



はじめて図書室が開設されてから100年を迎えた。その名も「立命館文庫」「立命館図書館」「立命館大学図書館」と変遷をたどった。当初は本学購入のほか岡村司、雉本朗造、仁保亀松ら本学講師であった京大教授や有志の方々からも多数の寄贈をうけて蔵書を構成していたようである（『法制時論』『立命館学誌』より）。いまでは「立命館大学総合情報センター」の中心機関のひとつであり有数の蔵書を誇る図書館になっているが、その役割は基本的には昔も今も変わっていない。わたくしは1968年から約19年間図書館業務に携わったのでいろいろの思い出や経験などの中からとくに印象深いことについてふれさせてもらいたい。

ひとつは図書館の配属になって一年くらい経ったころであろうか、立命館出版部から刊行された書籍のことで学外からの問い合わせがあった。戦前に存在した出版部についてまったく無知であったため先輩や同僚の方々に教を乞い、おまけに出版物の一部掲載したりフレッツのような出版案内のコピーまで参考にいただいた。これを出発点にしてそのときからわたくしの出版部調べがはじまった。立命館出版部がいつからいつまで存在して、どのような図書の出版をしていたのかを目的にして、昼休みや時間外に書庫に入って実物を確かめたり、国会図書館の書名目録と睨めっこしたり、時間をみつけては一生懸命に集中したものである。古書店や古本市にもよくでかけた。蔵書にないものは買い求めた。高価なものは図書館で購入していただいた。この調査は図書館の職場を離れてからも関心をもちつづけていた。おかげで百年史の担当になったとき思わぬところから資料が見つかって解明された事項もあった。わかった範囲でまとめたのが『立命館百年史紀要』第1～2号（1993～94年）に掲載してもらった拙稿である。

もうひとつは末川博先生の蔵書にかんしてであるが、わたくしはその時取書係の任についているときに役目上最初に受入業務をする必要があった。先生がお亡くなりになってしばらくして末川家から運び込まれたとき、当時の仮書庫に入りきらず廊下にもダンボール箱のまま積み上げられたほどたくさんあった。このときの箱の数は540箱あったことをいまも記憶している。その後京都府立総合資料館から生前先生から寄贈を受けられたが重複している部分を残しておられてその分が30箱ほど廻ってきた。そして元総長室にあった書簡などを主にしたものが確か4箱くらいあったかと記憶している。これらの図書・雑誌および一部書簡、新聞のスクラップをコツコツと毎日少しずつ埃を払いながら、挟み込みの資料等を調べながら、一冊々々記帳していったのであった。とくに關心させられたのは新聞のスクラップで小さな記事でも小まめに採っておられることである。あの忙しい先生がと思った。日付や新聞名が先生の筆跡であるから間違いなくご自分でスクラップなさっておられたものと思う。丁度ほとんどを開き終わった頃、人事異動で他所に出ることになり残念な気もしたがまたひとつの節目としてはよい時期でもあったとおもっている。これらの図書資料類は生前すでに先生からいただいていた図書資料類と遺品類も合わせて『末川文庫目録』としてまとめていただいていることはうれしいかぎりである。

もっとも自分の印象に残っている仕事をふたつばかりあげてみたが、まえのものは図書館へ配属されてからいまだ初期のことである。あとの方は図書館時代の最後をかざる仕事になった。時代のタイミングも合い興味をもって向かい合える仕事に携わることができたことは幸せであった。図書館に在籍しているうちに得た経験は自分個人にとってはいうまでもなく、のちに百年史の仕事をするうえでも役立っていることはまたいうまでもない。いまは非常によい経験と勉強をさせてもらったことに大いに感謝している。

にしおか しげゆき
図書館で勤務（1968-1987年）

「IT」との格闘

郷端清人



私が立命館大学の図書館に着任したのは1989年の3月で、おりしも図書館システムの概要設計が開始された時であった。当時、全国でもまだまだあまり稼動していない図書館のトータル・システム（学術情報システム：RUNNERS）の開発で、機種選定が終わって本格的なシステム開発が始まったのは、その年の7月頃からであった。実質の開発期間は8ヶ月しかなく、赴任したばかりで、かなりのプレッシャーがあったことを今でも記憶している。以前、文部科学省学術情報センター：NACSIS（現行の国立情報学研究所：NII）に在職し、全国の大学を中心に我が国の研究機関を結ぶ大規模なネットワークシステム（SINET）、図書・雑誌の目録所在情報システム（NACSIS-CAT）、学術情報データベースの検索システム（NACSIS-IR）等の開発に携わっていた関係から、技術的な点では大いに助かったが、図書館のそれまでの手作業から端末を通してのオンライン作業の切り替えや、目録カードの廃止など、今では、想像もできない壁が多くあった。1990年4月、無事に稼動した時は天にも昇る思いであった。ちょうどこの時期は、本学の第3次長期計画の後半にあたり、本学に「情報化」という柱が提起され、それを正に実践する時でもあった。図書館としては、「情報化」のベースとなる重要な作業として、100万冊を越える蔵書の目録カードのデータベース化（遡及入力）や新たな情報サービスへの取り組みに悪戦苦闘した。しかし、図書目録の自動登録システムや雑誌の自動チェックイン・システムなど、全国にも先駆けたシステムの開発に成功し、図書館の高度化・合理化を進めることができた。今から思えばこの時から、図書館の高度化や学園の情報化にむけてまさに「IT」との格闘であったと考える。

まもなく第4次長期計画が開始され、1994年の政策科学部の設置やBKCの開設など、本格的な学園の「情報化」にむけて、立命館統合情報システム（RAINBOW）の開発に携わった。そしてこの時期からネットワーク型のシステムが本格化し、インターネットが地球的にまさに草根のごとく増殖していた時期でもあった。それまでの専用回線・専用端末で構成された閉鎖的な汎用機システムから、ネットワークにリンクしたパソコンとサーバーで構成するシステムが主流となりつつあった。それを受けて、計算機センターや図書館および事務にあった3台の汎用機システムを全てネットワーク型の、いわゆるダウンサイジング・システムに、順次切り替える挑戦が始まった。その当時、今日のようなインターネットの世界が到来するとは全く想像もできないことであったが、IT技術がインターネット時代にむけて進化している最中で、予想とは異なる事故も多発し、安定するまではかなりの時間を要した。RAINBOWが完成したことにより、それまで図書館で蓄積していた図書・雑誌の目録所在情報をネットワークを介して自宅からでも検索できるようになった時の感激は今でも鮮明である。汎用機システムによる閉じられた世界から、Webや電子メールを含めて、インターネットを中心にIT技術への様変わりが強烈に印象に残っており、エポック的なIT変革を当初から体験できたことは、幸せなことだったと思う。

ネットワーク型のシステムが充実することによって、図書館サービスも広範囲に展開することができ、2000年に開学した立命館アジア太平洋大学（APU）の学術情報システムにおいてもRUNNERSのサービス機能を提供することができた。またシステムの機能が高度化することによって、業務の委託化を大規模に進めることができ、さらにネットワーク化が進むことによって、組織改革も大胆に進めることができた。それまでの計算機センター部門、図書館部門、事務システム部門を徐々に統合・再編し、現在の姿になるまでには、かなりの時間を要したが、全国の大学でもまれな組織となっている。本格的なインターネット時代を想定しての組織改革であったと確信する。これにより、トータルのシステムの開発と維持・管理が可能となり、図書館システムの高度化も進展してきたと思う。また経費の合理化をはかることができ、コア・データベースのサービスが可能になり、これはインターネット時代の図書館サービスのまさにコア・サービスにもなっており、感慨深いものがある。

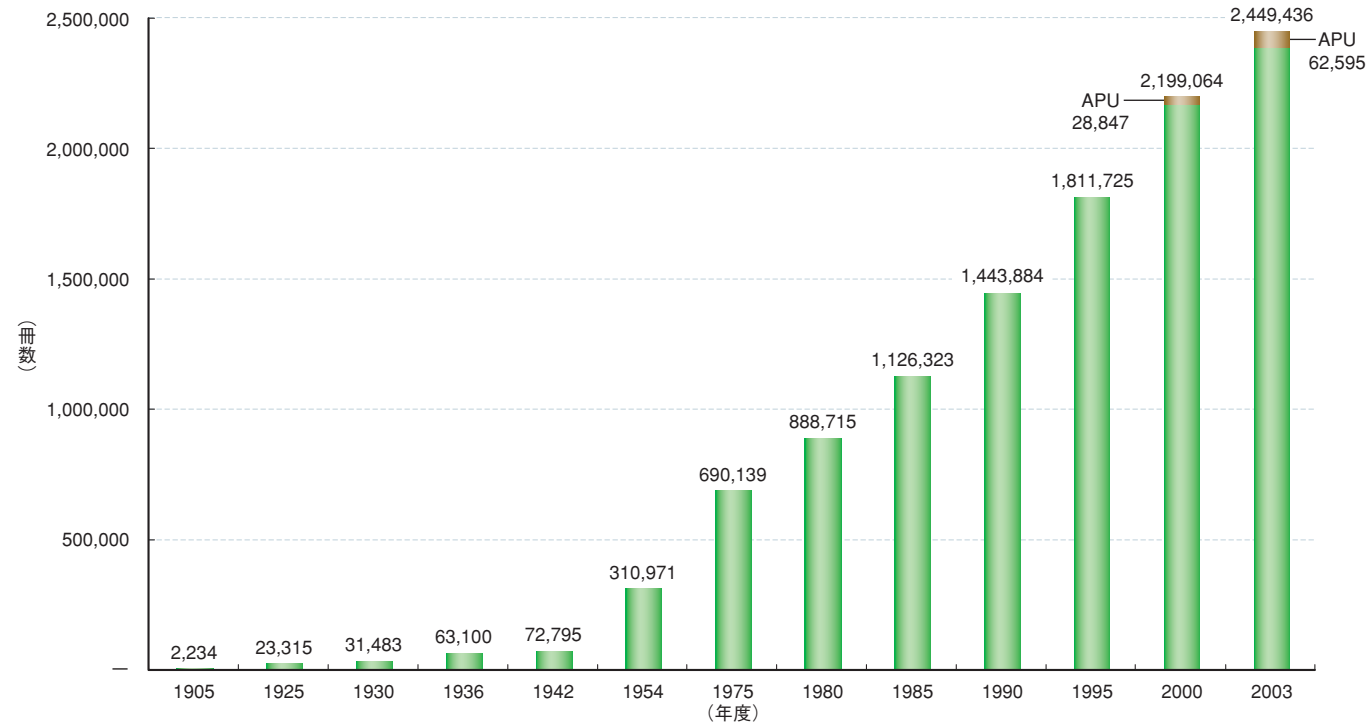
ごうば きよと
立命館大学 BKC 研究部門次長
図書館情報システム課長を経て、2001年3月まで総合情報センター次長。

統計で見る図書館100年

立命館大学図書館の100年を統計データで振り返ります。

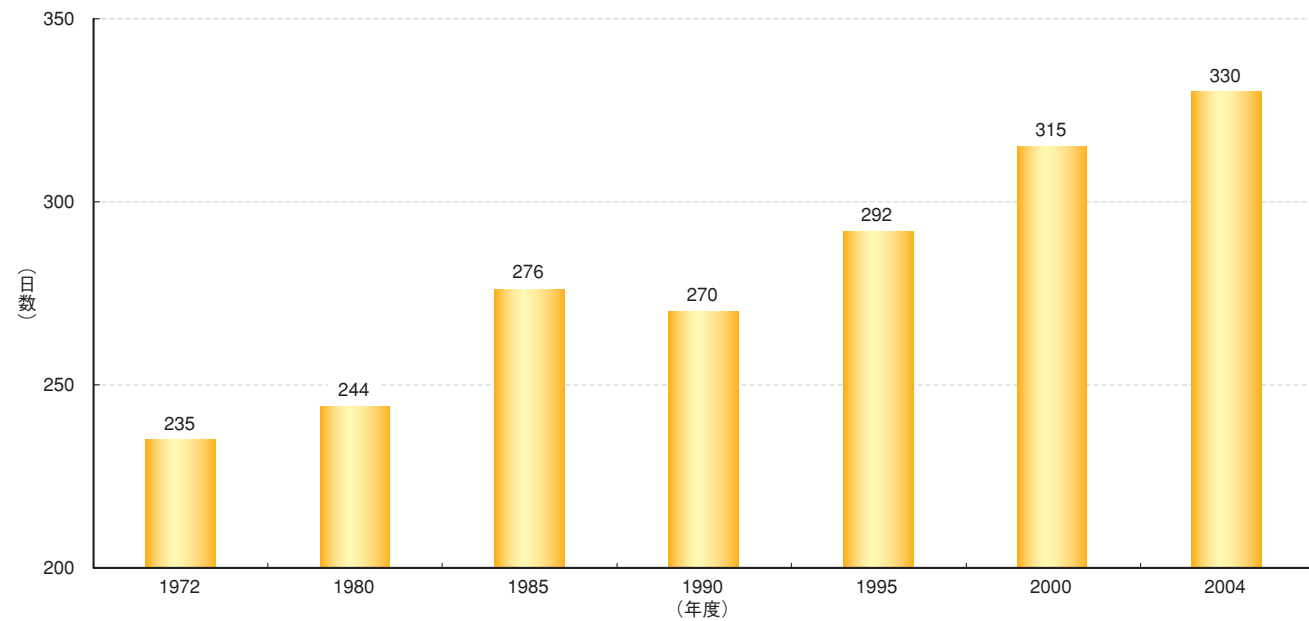
1 蔵書冊数

1905年には2,234冊だった蔵書冊数は100年間で着実に増えています。2003年度には、立命館アジア太平洋大学を合わせると240万冊を超えました。



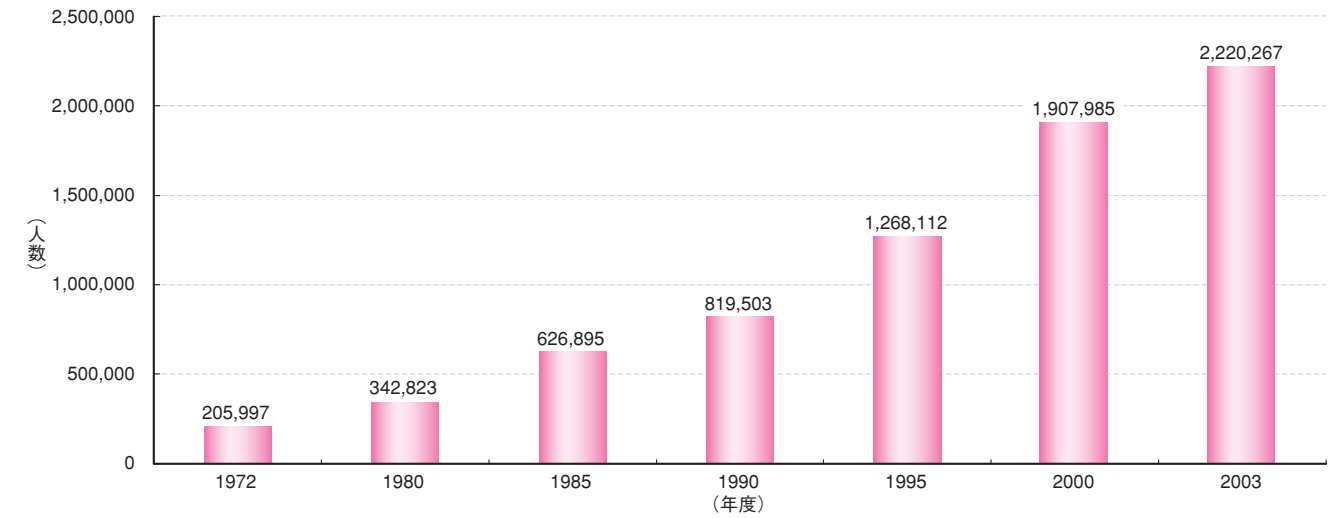
2 開館日数

本学図書館は、1978年に日曜開館を実施し、その後も開館時間の延長を積極的に推し進めてきました。2003年度からは開講期の月末休館を廃止し、全国の大学図書館の中でもトップレベルの開館日数となっています。



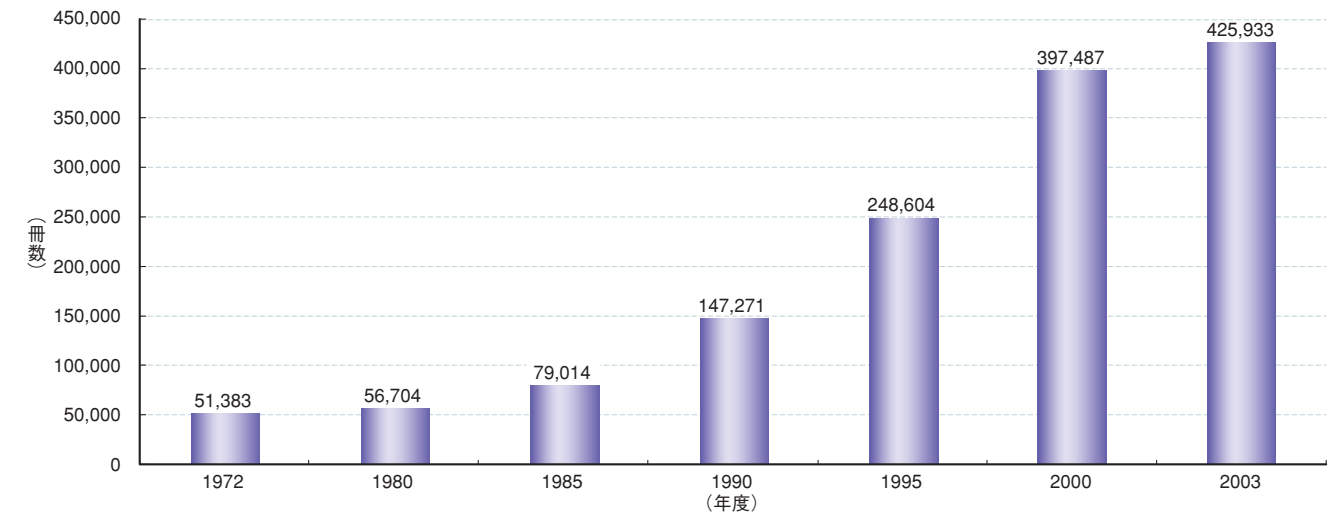
3 入館者数

学部の新設など利用対象者数の増加、情報環境の整備にともなって、増加しています。



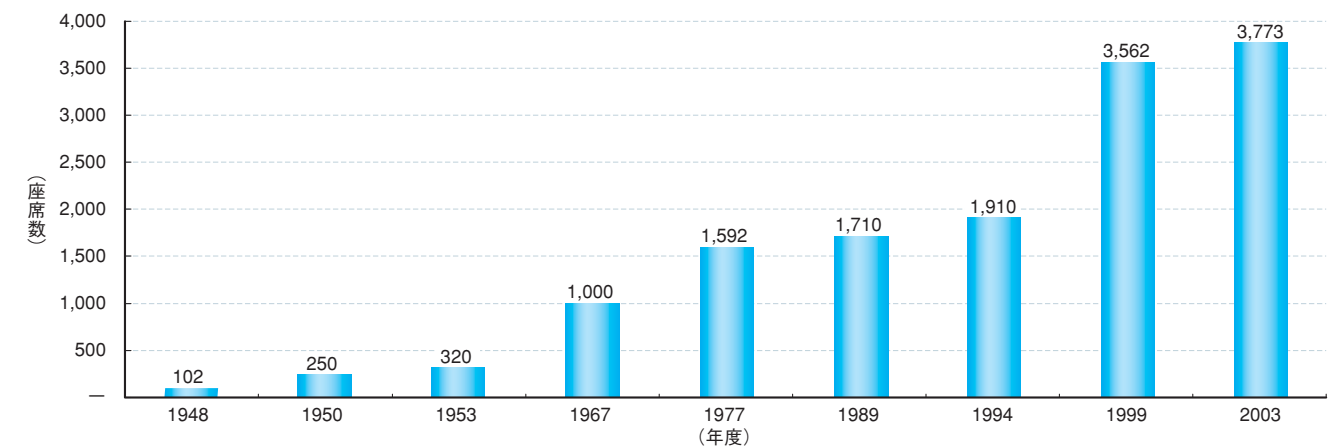
4 貸出冊数

貸出条件も改善してきています。1975年に3冊10日間だった学部学生の貸出冊数・期間は、2004年4月から10冊14日間に拡大しています。



5 閲覧座席数

衣笠図書館（1967年）、メディアセンター（1994年）、メディアライブラリー（1998年）の開設にともない、増加しています。



RAINBOW STAFF

マルチメディアルームや情報システム課窓口での利用相談、マルチメディアルームの巡回や情報教室の機器管理、講習会の講師などの業務を行っています。2005年1月現在、衣笠108名、びわこ・くさつキャンパス103名のスタッフが活躍しています。

業務内容の紹介

利用相談

パソコンやRAINBOWに関する利用相談・質問への対応、障害対応を行っています。わからないことがありましたら、お気軽にお尋ねください。

講習会講師

情報システム課では、先生方を対象にパワーポイント入門、ホームページ作成、コースツールなどの講習会を開催しています。講習会では、RAINBOW STAFFが講師を務め、参加した教員からは、「マンツーマンで説明を受けることができよかった」「説明が丁寧でわかりやすい」と好評を得ています。



RAINBOW STAFFのホームページ

<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/mr/i-system/rstaff/>

LIBRARY STAFF

衣笠図書館・修学館リサーチライブラリー・メディアセンター・メディアライブラリーで図書館の仕事を担っています。2005年1月現在、衣笠70名・びわこ・くさつキャンパス31名、合計101名の学生ライブラリースタッフが活躍しています。

業務内容の紹介

ガイダンス講師・補助

図書館で実施している検索セミナー・新入生向け図書館ツアー・書庫入庫ガイダンス（衣笠のみ）の講師や講師補助はライブラリースタッフが担っています。「親しみやすい」「自分の経験も話してもらえてよかった」と、受講生に好評です。



返却台の資料の配架

館内の返却台に戻された本のデータを取り、書架に戻す作業をしています。

館内掲示物の作成

館内のさまざまな掲示物を利用者の視点でわかりやすく作成しています。

ホームページの作成（衣笠）

「新着図書情報」を毎週更新しています。

職場体験学習

「職場体験学習」をする近隣の中学生を受け入れる際には、ライブラリースタッフが先生役です。

問い合わせ先一覧

<キャンパスネットワーク利用全般に関するお問い合わせ>

情報システム課

場 所：衣笠 有心館1階 tel：075-465-8275

びわこ・くさつキャンパス アクロスウイング2階 tel：077-561-2637

窓口時間：月～金 9：00～21：30

ホームページ <http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/mr/i-system/>

<図書館の利用に関するお問い合わせ>

衣笠図書館 tel：075-465-8217 e-mail：library@st.ritsumeai.ac.jp

修学館リサーチライブラリー tel：075-465-8248 e-mail：shugaku@st.ritsumeai.ac.jp

人文系文献資料室 tel：075-465-8189 e-mail：bunken@st.ritsumeai.ac.jp

メディアセンター tel：077-561-2634 e-mail：media@st.ritsumeai.ac.jp

メディアライブラリー tel：077-561-3943 e-mail：medialib@st.ritsumeai.ac.jp

立命館大学総合情報センターだより 100号記念特集号

発行 2005年4月

編集発行 立命館大学総合情報センター

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL 075-465-8216

FAX 075-465-8252

<http://www.ritsumei.ac.jp/www-lib/>